

# さざなみ



今も昔も変わらずに  
みやびな姿の天守閣

彦根城

明治時代中期に写された古写真（横浜開港資料館所蔵）

滋賀医科大学附属図書館報

No.50

## 目次

2002年 8月

これからの図書館のすがたは？.....	附属図書館長 可児 一孝.....	2
医学・医療の進展と医学図書館の役割.....	図書課長 伴 美子.....	3
電子ジャーナルへのアクセス要領.....		4
図書館探訪 ～兵庫県立看護大学～.....		5
お知らせ		
学生用図書・医学科4学年に時間外特別利用(24時間利用)を拡大.....		6
閲覧室を一斉リニューアル！.....		7
「自動貸出返却装置(ABCⅡ)」時間外「特別利用」での利用開始.....		7
附属図書館利用講習会(報告).....		7
本学関係者寄贈図書.....		8
表紙写真について.....		8

## これからの図書館のすがたは？

附属図書館長 可児 一孝



情報化の波が押し寄せています。文献も本や雑誌などを収集し分類保管して、広く閲覧に供し、文化を高めていくという図書館のあり方が大いに変わろうとしています。

昔は、特に新設大学においては、図書館の蔵書が貧弱で、文献が見つからないことが多く、また、相互利用も大変でした。長く待って送られてくるのはマイクロフィルムのネガで、自分で印画紙に焼き付けなければならない状態でした。研究はもとより症例を調べるにも、大きな大学の図書館に出かけて行って、『Index Medicus』や『医学中央雑誌』を一冊ずつ調べ、必要な文献を見つけると書き写して帰る、この労力は今では想像できないことでしょう。

その後、コピー機の登場は大きな進歩でした。10数年前からは、文献検索がonline化され、文献とサマリーが瞬時に検索できるようになりました。

そして、今回の電子ジャーナルです。わざわざ図書館まで出かけて読んだりコピーを取ったりすることなく、居ながらにしてインターネットで文献を読むことができるようになりました。本学においても、2002年の初めから学長裁量経費をいただいて導入を開始しました。幸い、文部科学省からの予算配分もあり、約1,300タイトルが電子ジャーナルとしてインターネットを通じて読むことができるようになっています。

未来の図書館がどのような姿になるのか、まだ見えていません。図書が全て電子化され、書庫がなくなってしまうかもしれません。それに伴って図書館も消滅するかもしれません。冊子体の本がなくなるということは想像しがたいことですが、長い歴史のある小型映画がビデオに駆逐され、レコード盤がCDになってしまったことを思うと、実現することかもしれません。

電子ジャーナルは、現在、多数の医科大学の図書館がコンソーシアムを組んで、電子ジャーナル提供会社と契約し、インターネットを通じて雑誌をダウンロードする権利を買うという方式で導入しています。提供会社によって、契約が各種ありますが、冊子体の雑誌を購入し、それにいくらかの料金を上乗せして電子ジャーナルを見ることができるといった契約が多いようです。

電子ジャーナルは自分のコンピュータからいつでも読むことができるという大きなメリットがありますが、電子ファイルとして保存できないようになっているものが多く、これは不便な点です。プリントアウトには時間と手間がかかります。コンピュータ化されると人手と紙と費用がかさむといわれる所以です。また、保存性に関しては、契約を止めるとバックナンバーを見ることができなくなることもあります。雑誌をぺらぺらとめくっているうちに、ふと良い記事が目に入るというようなことは期待できません。

本図書館では、冊子体の雑誌はできるだけ購読しながら電子ジャーナルを増やすようにしたいと考えています。

これから、ますます電子情報化が進むと考えられます。本学では、平成6年に学内LANを設置し、平成9年にはマルチメディアセンターが発足しました。そして、平成11年に、増築され、図書館とマルチメディアセンターが一体となってコラボレーションセンターとなりました。このような図書館と電子情報部門が一体となった機構は他の国立大学にはあまりみられないものです。コラボレーションセンターの最も大切なことは、各種情報の収集、発信、整理だと思えます。紙、電子、音声など多くの媒体を通して、あふれるばかりの情報が入ってきます。これを選択整理し、また外からの攻撃を防御しながら、利用者の最も使いやすい情報としていく、そして、学内からの情報を的確に発信していく、このような仕事をわれわれは推進していきたいと考えています。

(かに かずたか)

# 医学・医療の進展と医学図書館の役割

図書課長 伴 美子

去る5月23日から2日間に亘って開催された「日本医学図書館協会総会」に本学から参加しましたが、とくに「館長・主任司書会議」の中で、基調講演およびパネルディスカッションの内容が示唆に富み、非常に参考になりましたので、その概要を紹介します。



**基調講演：「新しい図書館と図書館員像をもとめて」**

国立情報学研究所 宮澤 彰 教授

**プレゼンテーション**

- ①「医療教育現場から求められる図書館の機能と役割、歯学教育の視点から」  
日本歯科大学新潟歯学部 片桐 正隆 教授
- ②「臨床医学(医療)からみた医学図書館への期待」  
大阪大学 生体情報医学講座 武田 裕 教授
- ③「電子時代の研究情報戦略」  
広島大学医歯薬学総合研究科 升島 努 教授

## A. 図書館の冊子体資料から電子媒体資料時代へ

——ここで考察すべきことは？

近年、学術資料のデジタル化はすさまじい勢いで進行しており、リアルタイムに、しかも自分の部屋からアクセスでき、研究遂行に計り知れない威力を発揮している。しかし、冊子体のようにページをめくりながら、学会で何が興味を持たれ、どう動こうとしているかを見ることはできないし、総覧性という面でも冊子体には及ばない。さらにバックナンバーの保存といった点でも保障の限りではない。(デジタル資料は「砂の城」と称されている。)

ゆえに将来にわたっても、図書館では冊子体・電子媒体両方の利点を採り入れて、資料を収集し、提供し、保存する役割を担っていくことが必要である。

デジタル資料の提供にはいろんな形態がある。一般的な形態としては、著者・研究者 学会 出版社 取次ぎ・書店 図書館 読者であるが、中抜きとして、著者・研究者 読者というモデルもある。例えば、非商業的デジタル資料の提供として、PubMed、preprint server、NEC Researchindex、MITへの投稿などである。米国では、商業出版社による価格値上げの対抗策として、図書館側による学術資源の連合「SPARC」を組織し、非商業的出版の支援や買い上げ保証を行っている。その影響もあって、出版社は日本に営業集中してきているのが実態である。現在、日本版の「SPARC」構想については、国立情報学研究所や国立大学図書館協議会で検討が進められている。他方、研究活動においては、「日本発のトップジャーナル」実現へのとりくみが望まれる。

## B. 医学教育・医療の現場から

——図書館はどう関わればいいのか？

最近の臨床医学は科学的根拠にもとづく医療

(EBM)を実践することに力点が置かれている。EBMとは、「診ている患者の臨床上の疑問点に関して、医師が関連文献などを検索し、それらを批判的に吟味したうえで、患者への妥当性を評価し、さらに患者の価値観や意向を考慮したうえで臨床的判断を下し、専門技能を活用して医療を行う」ことである。臨床現場では、診断・治療などに関する意思決定を短時間で進行する必要があり、インターネットやイントラネットなど電子環境の整備により、エビデンスにアクセスすることが不可欠である。医学図書館には、これらEBM関連のネットワークによる提供環境を整備することが求められている。

一方、エビデンスを作ることも同時に重要である。現在のエビデンスは欧米人の対象例を根拠とする場合が多く日本人を対象としたものが少ない。わが国の優れた臨床疫学研究の推進、構造的・系統的要約グループの育成がとくに必要である。また、電子的な提供には共通のプラットフォームが必要であり、UMIN(国立大学病院情報ネットワーク)と医学図書館との緊密な連携により、利用者により、わが国のEBMコンテンツセンター(ライブラリー)が構築可能であろう。

患者中心の医療の実現も重要な課題である。「インフォームド・コンセント」とは、患者が医療を選ぶためのものであり、患者の視点に立った医療が重要である。さらに、患者を支援して適切な医学医療関連情報源へ誘導する仕組みが必要である。最近、医療施設内の患者向け図書室の開設が注目されており、地域においても住民向けの医学図書館のニーズも高まっている。これからの医学図書館はこれらの多様なニーズに対応していくことが求められている。

(ばん よしこ)

# 電子ジャーナルへのアクセス要領

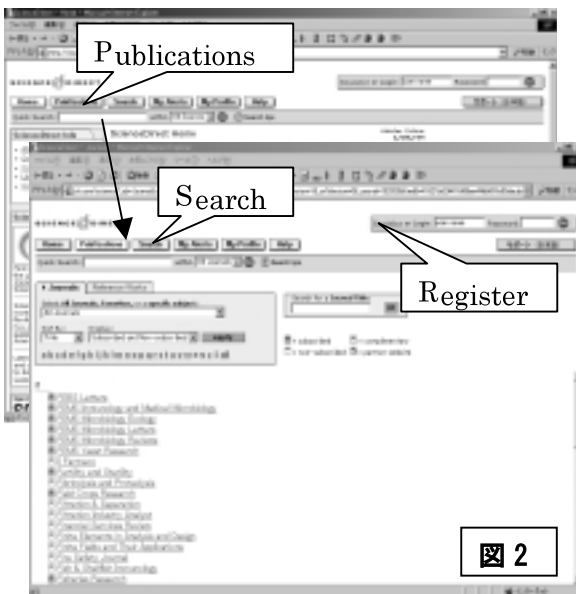
## (1) 目的の電子ジャーナルが学内で利用できるかをチェック



学内LANに接続されている端末から利用できる電子ジャーナルは、附属図書館ホームページにある「フルテキストの読めるオンラインジャーナルの全タイトルリスト」(図1)に掲載されています。各出版社等の提供先ホームページや学内個別契約リストへリンクされています。

<http://www.shiga-med.ac.jp/library/serials/current/abclist.html>

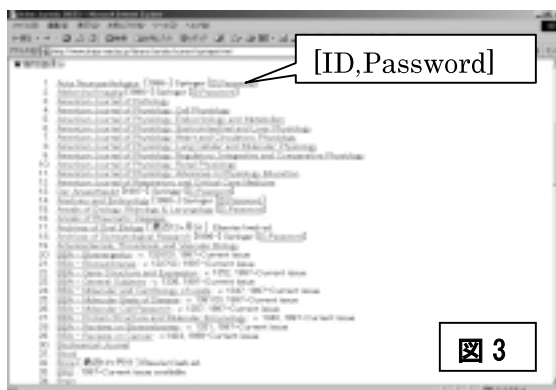
## (2) 出版社等の提供先のホームページでは.....



例：Elsevier社Science Directの場合（図2）

- ①ブラウズによる利用：「Publications」をクリック  
雑誌タイトルリストが表示されます。フルテキストまで読める雑誌は、雑誌タイトル先頭に緑の■マークの表示があります。目的の雑誌タイトルをクリック 利用したい巻号、論文を選びます。
- ②検索による利用：「Search」をクリック 雑誌・MEDLINE、Scirus(科学分野専門検索エンジン)から求める論文等を検索することも可能です。
- ③アラート機能：最初にユーザー登録が必要です(「Register」をクリック)。「登録した検索条件に合った論文が出た時」、「指定した論文が他の論文に引用された時」、また「登録した雑誌の最新号が発行された時」にメールで通知する機能があります。

## (3) 論文の本文を見るには.....



- ①本文の閲覧：本文のファイル形式がPDF形式の場合はAdobe Acrobat Readerが必要です。
- ②ユーザーネーム、パスワード：図1からリンクされている学内個別契約リスト(図3)で、[ ID, Password ]とあるものは、論文の本文を表示させる時に、ユーザーネームとパスワードの入力が必要です。[ ID, Password ]をクリックして、ユーザーネームとパスワードをご確認下さい。なお、ユーザーネーム、パスワードの取り扱いには注意して下さい。
- ③注意：電子ジャーナルの利用については、「自動的な大量ダウンロードをしない」、「個人的利用以外の目的で使用しない」、「複製・配布をしない」など、提供先のUser Agreementに定められている範囲を守ってくださるよう、よろしくお願いいたします。

## 図書館探訪 ～兵庫県立看護大学～

JR明石駅からバスで約6分のところに、公立では初めての看護の単科大学として、平成5年に開学した兵庫県立看護大学があります。門からつづく長い檜並木を進むと、安藤忠雄氏設計の斬新なデザインの学舎が緑の中に現れます。その高くそびえる研究棟の1、2階の円形部分が図書館となっています。

2階の図書館の入口へ向かう廊下には、新着図書案内として、本のカバーを紐でつるすという凝ったディスプレイがされており、利用者の目を引きまします。図書館の入口を入ると、右手にカウンター、左手には文庫・新書類、卒業論文、ビデオテープなどが置かれた低書架が並び、奥にはAVブースや検索コーナーが設けられています。3台設置されている文献検索用端末ではWEB版医学中央雑誌、CI-NAHLなどのデータベースが利用できます。



1階への長い階段を下りると、そこには窓にかかるカーテンにより明るさが調節された、吹き抜けの開放的な空間が広がります。ここが閲覧室で、ひときわ大きな楕円形のテーブルが1台と、少人数のための円形テーブルが置かれています。1階のフロアには図書と雑誌が和洋混配で配架されています。図書の蔵書約46,000冊の半数は看護学専門図書、医学関係図書であり、さらに大学院開設の際には心理学・社会学・教育学・人類学関係など看護学の周辺領域の図書を重点的に備えられたということで、看護学関係図書が充実しています。図書の分類は、看護学専門図書は日本看護協会看護学図書分類表に基づいて行われ、その他の分野の図書は医学関係も含め、日本十進分類法が使用されています。

また、阪神淡路大震災関連の災害看護図書のコレクションや、ナイチンゲールの著作や伝記、ナイチンゲールに関する著作など、1900年前半から中ごろにかけての洋書約50冊を集めたナイチンゲールコレクションなどが所蔵されています。

お探しの看護学関係図書が図書館で見つからない場合には、兵庫県立看護大学附属図書館に所蔵されていないかどうかOPACなどで一度確認してみてもいかがでしょうか。



兵庫県立看護大学附属図書館ホームページ：<http://lib.cnas-hyogo.ac.jp>

(OPACへのリンクはこちらから)

## お・知・ら・せ

## 今年度の学生用図書購入は、 一般教育科目・基礎医学・皮膚科学・小児科学・看護学を中心に

今年度に購入する学部学生用図書については、図書館委員会で審議の結果、他の分野に比べて収集が遅れている分野のものを中心に整備することが決められました。すなわち、一般教育科目・基礎医学に重点を置き、臨床系では皮膚科学・小児科学、そして特に蔵書数が十分ではない看護学は引き続き収集に努めるというものです。

文部科学省から配分される「学生用図書購入経費」については、今年度はほぼ半減という非常に厳しい状況にあります。図書館としてはこれまでの図書購入経費を何とか維持するため、できる限りの努力をしているところです。

学生・院生の皆さんには、「限られた数の貴重な図書」という認識をもっていただき、貸出図書の返却期限を守って下さるようお願いいたします。

## 時間外特別利用(夜間・休日の無人開館利用)を 医学科4学年に拡大(登録制)

図書館では、夜間・休日における無人開館時の図書館利用を、教職員・大学院生等、および学外臨床実習協力病院の所属職員・医学科5・6学年・看護学科4学年の各登録者に認めるという措置をとっていますが、7月1日より、医学科4学年に対しても適用し、登録申込みしてきた学生に事前のオリエンテーションを行ったうえで、この特別利用を認めることとしました。

この時間外特別利用については、平成7年度から実施され、最初は教職員・大学院生等の利用で始まり、同年7月からは学部学生全員にも利用を認める措置がとられました。この状態は平成10年まで続きましたが、この間において、特に学部学生の利用マナーが非常に悪く、他の利用者からの苦情が度々寄せられるようになりました。そして、図書館委員会でいろいろ対応策を検討した結果、同10年12月以降は学部学生の時間外特別利用を停止することとなりました。しかし、国家試験を控えている6学年と臨床実習の始まる5学年にとっては、図書館の利用を9時～20時に制限されることは大きな痛手であることから、当時の5・6学年有志は自ら利用マナーの向上を心がけるよう学生に呼びかけ、学生による図書委員会を組織して自主管理に努める姿勢を示しました。図書館委員会では、高学年による自発的な改善への努力を評価して、同11年11月から医学科5・6学年と看護学科4学年に対しては登録制による時間外特別利用を開始することにしました。

以来、これら高学年による利用については、現在のところ大きな問題は起っていませんが、それでも一部の利用者によっては日頃の利用マナーが悪いケースも時々見受けられます。そういう人は自分だけが良ければいいという利己的な考えでいるから、他の利用者への迷惑までは思い至らないのだと思います。学生の皆さんには、過去の利用停止に至った経緯を忘れることなく、各自が気持ち良く館内で勉学できるように心がけてほしいと願っています。

## 閲覧室内を一斉リニューアル！ —創設以来、23年ぶり—

附属図書館は昭和54年に竣工し、平成11年10月にはマルチメディアセンターとの統合建物「コラボレーションセンター」として生まれ変わり、館内も改築されましたが、閲覧室は1・2階とも内装が未実施の状態が残されていました。しかし平成13年度末において、1・2階共に床カーペット・壁クロスの張り替え、全閲覧椅子の更新等を行い、晴れて新しい建物にふさわしい閲覧室にリニューアルできました。



まだ残された課題としては、玄関口の自動ドア化・車椅子併用の入退館ゲートへの更新・古いトイレの内装などがありますが、より快適な環境をめざしてこれからも努力していくつもりです。

この写真では、モノクロのため、美しくなった室内が判りづらいですが、床はベージュ、壁は真っ白、椅子はブルーを想像しながらご覧下さい。

この写真では、モノクロのため、美しくなった室内が判りづらいですが、床はベージュ、壁は真っ白、椅子はブルーを想像しながらご覧下さい。

### ～「自動貸出返却装置(ABC II)」時間外「特別利用」での利用開始～

平成14年3月から開館時間内において「自動貸出返却装置(ABC II)」での貸出・返却を行ってきましたが、8月1日から時間外「特別利用」まで拡大し、実施しています。利用対象資料は図書と製本済雑誌です。

#### 【操作手順】

- | 貸 出      | 返 却               |
|----------|-------------------|
| ①「貸出」ボタン | ①「返却」ボタン          |
| ②利用証の読取り | ②図書を置く            |
| ③図書を置く   | *複数の場合は           |
| *複数の場合は  | くり返す              |
| くり返す     | ③「終」ボタン           |
| ④「終」ボタン  | ④図書を返却用ブックトラックに置く |
| ⑤利用証を取る  |                   |

#### 【画面事例(貸出時)】



### 附属図書館利用講習会(報告) (平成14年2月～7月)

- 4月1日 新規採用職員への図書館案内
- 5日 大学院修士課程看護学専攻 図書館オリエンテーション
- 9日 新入生オリエンテーション
- 5月13日 平成14年度医学総合研究特論(大学院特別講義)文献検索に関するオリエンテーション
- 16日 平成14年度大学院修士課程看護学専攻第1年次生 文献検索ガイダンス

## 寄贈図書紹介

京のシルバー医 (京都新聞出版センター 2002)	岡田慶夫名誉教授	著者
DSM-IV-TR精神疾患の診断・統計マニュアル (医学書院 2002)	高橋三郎名誉教授	訳者
[ビデオ]生涯教育講座 腎臓疾患シリーズ全4巻 (協和企画ユーエヌ 2002)		内科学第三講座
コレステロールを下げる個別健康教育指導者マニュアル (保健同人社 2000)	上島弘嗣教授 (福祉保健)	著者
高血圧の個別健康教育指導者マニュアル (保健同人社 2000)	"	"
禁煙の個別健康教育指導者マニュアル (保健同人社 2000)	"	"
コレステロールを下げる健康教育 (保健同人社 1994)	"	編著者
動脈硬化・老年病予防健診マニュアル (メディカルレビュー 2001)	"	"
脳卒中などによる寝たきり・死亡の健康危険度評価システム開発事業 (日本循環器管理研究協議会1995)	上島弘嗣教授 (福祉保健)	
循環器疾患基礎調査成績に基づく医療のガイドライン作成事業 (日本循環器管理研究協議会 1996)	"	
一步一步学ぶ心電図 (三原医学社 1998)	小山なつ助教授 (生理学第一)	
シンプル病理学改訂第3版 (南江堂 1999)	小笠原一誠教授 (病理学第二)	
新病理学総論第14版 (南江堂 1991)	"	
新病理学総論第16版 (南江堂 1998)	"	
新病理学各論第13版 (南江堂 2000)	"	
エッセンシャル病理学第4版 (医歯薬出版 1994)	"	
哲学辞典 (法政大学出版局 1988)	医学系研究科看護学専攻平成13年度卒業生一同	
感情の社会生理心理学 (金子書房 2002)	"	
心理学辞典 (有斐閣 1999)	"	
新社会学辞典 (有斐閣 1993)	"	

## 表紙写真について

この古写真は、明治中期に外国人観光客向けの「おみやげ写真帳」として売られていた写真の一部で、モノクロ写真に職人が手で色づけしてカラー写真のように細工したものである。

このように天守閣を撮影した明治中期の写真はあまり多くないらしく、比較的多く見つかるのは名古屋城である。では、彦根城はなぜ写されたのか？ それは幕末の藩主井伊直弼の知名度によるのではないだろうか？ 「桜田門外の変」は、「赤穂浪士の討ち入り」とともに外国人の間では有名であった。現に外国人による日本史の記述にも度々あらわれ、よく知られた事件であった。その悲劇の中心人物である井伊直弼の居城ということでも写真の被写体として選ばれたのかも知れない。

琵琶湖を背にする東面。彦根城天守閣の特徴が最もよくつかめるアングルである。この写真のイメージは今行っても殆ど変わらない。写真には松の木がかなり見えるが、現在は殆どシイとカシ。左手にみずばらしい小屋があり、茶店らしい。写っている数人の子供のうち3人は前掛けをしており、ここで商いをしている親の手助けをしているのだろう。

城ばかりが美しく立派で、茶店や子供の服装との落差が著しい。